

小特集2 ■ ASIAGRAPH2012 in Tokyo 報告



■ 総括

池井 寧 (ASIAGRAPH Program CoChairs)
 首都大学東京

小木哲朗 (ASIAGRAPH Program CoChairs)
 慶應義塾大学

本年のアジアグラフも例年のように、日本科学未来館において10月25日から27日まで、デジタルコンテンツ EXPO の中で開催された。今年は DCEXPO 全体の実施形態が大幅に変更になり、アジアグラフを含む、これまでの三つのサブカテゴリが統合されて、一つのイベントとして行われた。それに伴って、アジアグラフの恒例となっている匠賞、創賞の受賞記念シンポジウム(次節参照)とCGアートギャラリーが従来通りに華やかに行われたほかは、アートと最先端テクノロジーが融合する技術芸術展示セッションが、DCEXPO の新規の企画となる Innovative Technologies や Content Technology Showcase の中に取り込まれて披露されることとなった。Innovative Technologies は、経済産業省が優れたコンテンツ技術を発掘・表彰する今年からの行事であり、アジアグラフのグループからは、東京大学河口研究室の「宙海月一触手ロボット」、東京大学廣瀬・谷川研究室の「拡張満腹感」、首都大学東京池井研、東京大学広田研、NTT による「追体験のためのバーチャル身体技術」ら

が採択表彰された。例年通り2万1千人以上の来客を迎え、NHK を始めとする各種メディアに紹介される盛会となった。尚、国際会議セッションは、2013年4月にハワイで開催される Asiagraph 2013 に移行して実施される予定である。

■ 匠賞・創賞 授賞記念シンポジウム 「日本の表現は世界に通用するか？」

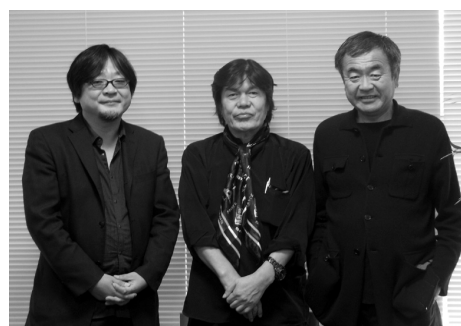
川喜田千晶
 東京大学

今年の匠(たくみ)賞は建築家の隈研吾氏、創(つむぎ)賞はアニメ監督の細田守氏が受賞した。隈氏は「水／ガラス」「那珂川町(なかがわまち)馬頭(ばとう)広重美術館」などで国際的に活躍、2013年着工予定の新・歌舞伎座の設計でも世界から注目されている。細田氏は「時をかける少女」「サマーウォーズ」など数々のヒット作を生み出し、最新作の「おおかみこどもの雨と雪」は今もロングランヒットを続ける、話題のアニメ監督である。この受賞を記念して、「日本の表現は世界に通用するか？」をテーマに、東大教授・CGアーティストの河口洋一郎氏がモデレーターを務め、シンポジウムが開催された。

隈氏・細田氏共に、「日本における表現」にこだわり抜いたのち、世界との繋がりを築き上げていったという



授賞記念シンポジウム会場の様子



左より、細田 守氏、河口洋一郎氏、隈 研吾氏

共通点があるが、興味深かったのは、その表現における両者の共通項である。隈氏は細田氏の映像を観て、自らの表現にも共通する「レイヤー」「浮世絵」といった問題と重ね合わせる。「アニメは重ねていく構造が面白い。切りとられた画面のなかにこそ素晴らしいものがある。」「アニメの良さはやわらかさとやさしさ、そこにはフランク・ロイド・ライトやゴッホに通ずるものがある。」

「どんなに切り取られた空間の中であっても、無限にその世界を奥行きを広げていくことができるのが日本文化の特徴」と解説する隈氏、「最初は違和感のある表現であったとしても、新しいことを応援して欲しい。見守って欲しい。」と挑み続ける細田氏、ジャンルの違いこそあれ、表現に対する真摯な姿勢と、これからの世界に新たな日本の表現を開花させる可能性を感じさせるシンポジウムで、会場を大いに沸かせた。

■展示参加報告

阿部浩二

首都大学東京

本年度の展示は昨年同様、日本科学未来館 1F にて開催された。個々のスペースはやや縮小された感があったものの多くのブースがひしめきあい、非常に賑やかな雰囲気のある会場である。本年度は、“イノベーションによってコンテンツ産業の発展に大きく貢献することが期待される技術を表彰する事業”として経済産業省が実施した「Innovative Technologies」の採択・表彰も同時に開催された。このため、フロア全体が2つのブロックにほぼ等分され、DCEXPO2012 展示スペースにおいて 27 件、Innovative Technologies 展示スペースでは 22 件の展示が行われた。各展示についてのダイジェストを以下で紹介する。

Innovative Technologies 展示スペースの中でも一際注目を集めていたのが、慶應義塾大学の稲見先生らによる「透明プリウス」である。再帰性反射素材を車内の後部シートに導入し、本来死角に位置する情報をドライバーが見渡せるほどに投影可能としていた。日常使用することの多い車という題材とあいまって、体験者が途切れない大変盛況な展示となっていた。

異色の展示としては、東京大学の廣瀬先生らによる「拡張満腹感」が挙げられる。同技術は、HMD 越しに自分の手元を見た際に、持っている食品のサイズを変更すると同時にそれを保持している手の形状が自然に見えるような変形・提示を行い、サイズの異なる食品を実際に食べているかのような感覚を利用者に与える



会場内風景。奥がセンターステージスクリーン。

ものである。リアルタイムに行われる処理と、人が得られる満腹感が異なるという実験結果は非常に興味深く、VR が日常生活に応用され始めていく可能性を強く感じさせるものであった。

首都大学東京の池井先生らによる「追体験のためのバーチャル身体技術」では、ミラノでの仮想旅行と陸上短距離走での世界記録を体感する技術が展示された。7つのデバイスを同時に駆動することで多感覚の刺激情報を同時提示するシステムである。座したままの状態でも走行感を出すという非常に難しい課題への挑戦は、人の身体状態に寄らない身体感覚を提供する点で、VR 技術の新たな利用方向性として期待された。

他にも、東京大学苗村研の橋田氏による、フォトリソミック素材を用いた手書きの文字をその場で即コピー・再利用や、消去が可能な「Hand-rewriting」、パナソニック株式会社による 5 面分同期撮影し視野角 150 度に並べられたディスプレイに 3D 映像を提示する「DIVE into World Heritage 3D」等、興味深い展示が多数行われていた。

本年度の傾向としては、最先端の技術展示だけでなく、企業ブースの増加にも伴い、商用レベルあるいはその一歩手前といったシステム機器・可能な体験の完成度の高さを前面に出した展示が多く見られたように思われる。参加者が想像で補うのではなく、実際に体感出来てしまう展示を、非常に楽しめる会場であった。



展示デモ体験風景